

小林勝作品集
4

小林勝作品集——第4卷

©1976

一九七六年二月五日印刷 一九七六年二月二十五日発行

著者——小林勝

装本——駒井佑二

発行者——臼井浩義

印刷所——大進印刷株式会社

製本所——中村製本株式会社

*

発行所——株式会社白川書院

東京——東京都新宿区左門町三ノ四 ☎〇三—三三—三三四 千一六 振替東京一七六四号
本社——京都市左京区北白川追分町八七 ☎〇七五—九一—三六〇 千六六 振替京都九三
0393—7568—3114

小林勝作品集

第4卷

編集委員

野間

長谷川

菅原

中野

四

克

重

野

宏

郎

己

治

第4卷——目次

チョッパリ

蹄の割れたもの——7

架橋——56

無名の旗手たち——88

目なし頭——134

私の「朝鮮」——あとがきに代えて——248

*

赤ん坊が粟になった——257

黒い夏——268

紙背

283

ささやかな余波

334

解説 野間
解題 藤井

宏
徹

381

365

チ
ヨ
ツ
パ
リ

蹄の割れたもの

東京・一九六八年

ぼくは職員食堂にいた。ぼくは多分、青ざめていたように思う。レジの少女がぼくに定食の食券を渡しながら何気なくぼくを見上げた時、彼女の何時も人からかかっているように見える微笑が、ほんの瞬間だが、柔らかな顔の皮膚の中へすうっと吸いこまれてしまったのをぼくは見逃さなかった。ぼくはまったく食欲がなかった。そればかりでなく、ぼくの暗い腹の中で、ぬらぬらした小腸がまたしても大きくうねるのを感じた。ひきつるような、不快な痛みが起こった。それで、ぼくは、自分が自覚しているよりずっと強く腹をたてており、神経が異常に緊張していることがわかった。食べなくてはならないんだ、こういう時こそ、とぼくは思った。どんなに無理をしても食べなくてはならない、そうしないとおれの心も体も遠からず参ってしまうのはわかっている。

ぼくは定食のほかに、キャベツのふんだんにそえられている魚のフライと豚汁を追加注文し、金を払い、人影の殆どない広い食堂を横切って、一番隅の席に腰をおろした。

窓の外にひろがる芝生のずっと先は松林でさえぎられていた。松林を背景にして花壇が見えた。花壇は様々な絵具をたった今したり落としたように華やかで、濡れたような艶を見せながら、そこだけ鮮かに

盛りあがっていた。

梨山玉烈が、たとえどんな理由つけてかき口説いたとしても、とぼくは先刻からかみしめていた言葉をまた胸の中でくり返した、梨山の主治医だったおれは、あの時、七月退院の許可を与えるべきではなかったんだ。すると唇がひとりでに震えだし、片側へゆがんでいこうとするのがわかった。おれは今、きつと醜い、みじめな顔をしているに違いない、とぼくは思い、喉の奥がはりつくように熱くなるのを感じた。

空も、松林も、芝生の中の小道も、花壇の前を歩いて行く若い男女の患者たちも、すべてが秋の陽の光を浴びて、明るく、乾燥して、透き通っているように見えた。

おれは絶対にあんなに早く退院を許可してはならなかったのだ、とぼくは考えつづけた、しかし、梨山ときたら、あの時……。

突然、澄みきった秋の光が、何処かでぱっとまばゆくはじけて、きらきら輝いた。ぼくの頭の中の言葉はその衝撃で途切れてしまった。ぼくの眼のレンズの中で、それまでもやもやと融け合ってゆらめいていた様々な色彩の流れが、静かに固まっていたと思うと、不意にもものの形となって浮びあがり、その中心に一人の少女がいた。秋の光がはじけたのではなかった。腎臓結核の手術後の経過が順調で、間もなく退院することになっている魅力的な女子高校生が、花壇の前で花壇よりも華やかに笑っただけのことだった。

お願いしますよ、先生、七月の退院、駄目ですか、絶対に駄目ですか、というあの時の梨山の低い声がぼくの頭の中で響いた。それは確かに声には違いなかったが、ぼくにはなにか得体の知れないねばねばした霧のような息苦しいものと思われた。ぼくが口を開きかけると、そのたびに梨山はずんぐりした骨太の重そうな手を、ひら、ひら、と軽く動かしてぼくの言葉をさえぎりながら、自分の言葉を何時までもとめようとしなない。そして、彼はぼくの眼から自分の視線を決してはなそうとしなかった。その眼の光は、まるでぼくが、理不尽に彼を拘束し、苦痛と不安を与えつづけていると難詰しているような、黒々とした怨

念のこもった光だった。

私がですねえ、とあの時梨山はつづけたのだった、一日も早く帰ることがどうしても必要なですよ、私がですねえ、家へ帰って家庭のたてなおしをしなければ、私の家はですねえ、遠からず、きっと破滅しますよ、それは確かだ、私の家はですねえ、空中分解の一手手前まできているんですよ。

家庭とか、破滅とか、空中分解といった、およそ療養所の空気とはかけはなれた単語を投げられて、ぼくは少しづつ、ほんの少しづつ、気だるくなり、沈んだ気分になちこんでいった。それは梨山という日本姓をいまだに名乗っているこの朝鮮人のせいではなく、退院を待ちこがれるどの患者にしても同じだった。これは肺外科医の、どうしようもない無力感というものののだ。なるほど、ぼくたちは患者たちの結核とは全力をつくしてたたかうことが出来るし、やってもきた、しかし、それから先は……。

梨山のレントゲン写真を前にして、肺切除にするか、胸郭成形にするか、ぼくたちはかつて幾晩も討論をかさねたのだった。彼が元の職場へ戻って行く時、中年の彼の体とその活動にとってどちらの手術がよりよい結果をもたらすか、というそのことのために、議論のための数時間という、まことに貴重な時間が消費されたのだ。しかし、梨山の際限もない低い声を浴びていると、あの熱っぽい議論や、その挙句の肺切除手術や、輸血による血清肝炎へのおそれや、そのための細心の検査や観察といった生々しくもおびただしい事実の細片が、次第に存在感を欠いた虚しい影になって遠のいていくのをぼくは感じはじめていたのだった。

ぼくは、恨みがましく喋りつづけている梨山玉烈の部厚な唇が、唾液で濡れて気味悪く光ってくるのをじっと見ていた。手術を頼むためにぼくの前へはじめて現れた時ひと目見て、心臓に疾患があるのではないかと疑った時と同じように、その唇はどす黒く、紫がかった色をして光っていた。それは開いたり、閉じたり、横にのびたり、ぎゅっと縮んだりしながら、その奥の暗い穴の中から、言葉は途切れることを忘

れてしまったかのように、何時までも、ずるずると出て来るのだった。

私のようにこの病気でながいこと家をはなれているとですねえ、と言葉はまたぼくの頭の中でくっきりとしたかたちと意味をもちはじめた。家庭というものがしまいにどんなものになって来るものなのかおわかりですか、先生……本当かなあ、本当にわかってもらえるのかなあ、普通の状態では想像もつかないようなことが少しずつ起こって、それがだんだん家の中にこびりついて、そして気がついてみると、それはもうまったく前とは違ったものになっているんですよ、北野さんという女の患者がいましたねえ、手術はうまくいって、あと半年もすれば退院できるところまできたのに、この冬自殺してしまったあの人ですよ、あれは、私たちにとってひとつとじゃないんですよ……。

ぼくは忙しかったのだ。週二回の手術の間には、気管支鏡による検査から血液型検査にいたる種々雑多な検査に次から次へと追いまくられていたし、ぼくの担当する、術前術後の患者たちすべてを日に一度は回診しなければならなかった。その上、手術を目前にひかえた患者の緊張をやわらげ、無用な不安を取りのぞき、勇気を与えてやるために、手術についてのオリエンテーションもしなければならなかった。梨山のまわりくどい話に何時までもつきあってはおられなかったのだ。七月は早すぎる、九月まで辛抱しない、とぼくはあのときっぱり言わなくてはならなかったのだ。おれが何時ものように、断定的にものが言えないのは、おれたち外科医が何とかしたくても出来ない無力感につき落とされる、あの家庭の不安とか、困難な職場復帰とか、貧困とか、愛情破綻とか、そういったことに属する話を梨山が口にしていてというだけの理由からだろうか、とぼくは梨山の紫色の唇がのび縮みするのを見つめながらぼんやりと考えていたのだった、それとも、梨山という日本姓の男の国籍が朝鮮だから、それでおれは。……ぼくは強く頭をふり、つづいて湧いてこようとした一群の言葉、その言葉と共にたちのぼってこようとした一群の、光、色、かたち、におい、そして触覚たちを自分の胸の闇の沼の中へおしこんだ。

北野さんはまったく私たちを悩ませましたからねえ、と梨山が看護婦の方をちらっと見てから囁くように言った、あの人が自殺した時は、みんなひどくショックを受けましたよ、あの人は内科病棟に四年もいて、手術をためらっていて、内科の先生と何度も喧嘩したそうですよ、手術しないなら、これ以上内科でやることはもう何もないんだから、退院するなり、よそのサナトリウムにでも移ったらどうだとまで言われたそうですよ、それでも北野さんは手術をためらっていた、なぜだか御存知ですか、先生、あの人にはねえ、入院前に結婚の約束をした恋人がいたんですよ、手術をするとしたら胸郭成形だといわれて、たえうまくいっても、それ以後の結婚生活や自分の体に自信がもてなかったんでしょねえ、それで内科ですむことなら何とか内科でと心頼みしていたらしいんですよ、あの人はとびきり美人というわけじゃなかったが、なんともいえないやさしいなで肩で、肌が白くてなめらかで、中年の私なんかにはとてもやりきれない色気がありましたねえ、あの人は、婚約者を絶対に信じていて、同室の女の人たちをずい分悩ませたそうですよ、先生は御存知ないでしょうかねえ……。その時、梨山の脂の浮いた小鼻と上唇がかすかにひきつって、それは如何にも淫らな笑いに変ったので、ぼくが思わずさえぎろうとすると、それより一瞬早く梨山は手をふって、ま、ま、とぼくの言葉をおさえてしまっただけだった、日曜日にはねえ、かならず男が来て外へ出て行きましたよ、二人は清明旅館のおとくい様だったんですよ。

梨山の細い小さな眼は油の表面のようにねっとりとし光り、その顔全体がひどく醜くなった。

あの少女のような北野さんが、まるで泣いたあとのようにねえ、眼をうるませて、そのくせ白い首すじから耳たぶまで赤く上気させて帰って来て、食堂の椅子にすわって、いつまでもぼうつとしているのを見ると、私たち男の患者は息をのんだものですよ、それからみんなどういうわけだかやけくそのような気分になって、ずいぶん荒れましたねえ。

梨山はおれのことは何も知りはない、とぼくは思ったのだった、知りはないが、けものが闇の中で

も獲物を嗅ぎあてるように、たしかにおれの胸の闇の中にこいつは何かを嗅ぎあてているにちがいない、それは梨山のような男たち女たちが、ながい生活の中で身につけて、いまは殆ど本能的な感覚にまでなっていましたあの力だ、それに違いないのだ。

何かの都合で、と梨山はぼくの眼の中をのぞきこむような異様に力のこもった視線をぼくに注ぎながら言った、日曜日に検尿のために尿をとったことがありましてねえ、あとになってから看護婦の一人が北野さんのことをひどく嫌がりましたよ。何を嫌がったんですか、それまで黙っていたばかりが思わず言った。

いやあ、と梨山は奇妙にかすれた声で笑った、検査の時、あの人の尿の中に、発見されたんですよ。何が発見されたのですか。ザーメンですよ。そう看護婦が言ったんですか、とぼくは言った、誰ですか、その看護婦は。

ぼくの声は殆ど怒声に近いものだったに違いない。処置室の遠い隅で器具の煮沸消毒をしていた少女の看護婦が、びんと体を硬直させ、口をあけたまま怯えた顔をしてぼくの方を見た。

まあ、誰でもいいじゃないですか、噂ですよ、噂、と梨山はあわてたように手をふったが、その声はまったく冷静で少しも変わっていないのだった、北野さんはその恋人のために、ぐずぐずしているのはいけないと思って、そして手術を受ける決心をしたんですよ……ところが、男は、あの人が手術を受けてまだひと月にもならない頃、突然別の女と結婚してしまったそうなんですがね……。

北野というその女子患者はこの二月に、自殺したのだった。ためらい怯える彼女を励まして手術をおこない、その経過が極めてよいことを喜んでいたばかりの同僚が、彼女の突然の自殺でどれほどうちのめされ、虚脱状態におちこんだか、それをぼくはつらい気持ちで思い起こした。

梨山の低い声は、少しのよどみもなくつづいていた。こんな種類の話を、しかもゆきつくところは結局自分自身のことになる話を、こんなによどみなく、冷静に、まるで散文詩でも読んでいるように、普通の

人間が喋りつづけることがいったいできるものだろうか、とぼくは、一刻の休みもなく開いたり閉じたりする二匹の虫のような濡れた唇と、丸くなったり、いびつになったり、大きくなったり小さくなったりする暗い穴をみつめながら考えていた。そして、不意に、この男がこんなに冷静に喋りつづけられるのは、その言葉が、如何に巧みであるとはいえ、しょせん彼にとって外国語であるからに違いない、という考えが閃いたのだった。

三年間、自分の家庭から切りはなされていて、一日と家が変わって行くのにそれを空しく見おくっているのは、たまらないことですよ、先生、と梨山は言った、北野さんの話とはまるきり違うが、私の妻は日本人でしてねえ、私よりひとまわり若いんだが、外へ出て働いているうちに、あれは、段々と変わってきているのです、どう変ったかということは夫にしかわからない微妙なことで、口ではうまく言えませんがねえ、私を見るちょっとした眼つきとか、偶然、私の手があれに触れた時に、反射的にびくっと体をひく感覚とかねえ、とにかく、私はおそれていたなにかが次第に姿を現わそうとしていると思えてならないんですよ、いま私が家庭へ戻っていかないと、先生、なにかがきつと起こる、そんな感じに私はつきまとわれているんですよ。

それでもやっぱりぼくはあの時、彼の主治医として、七月退院を許可してはならなかったのだ。その理由はぼくが誰よりもよく知っていることだった。

梨山玉烈の右肺上葉摘出手術は三月だった。ぼくは彼に二千CCの預血を準備させておいたが、手術は簡単に輸血は千四百CCで済んだ。経過は順調だった。肺はよく伸びていたし、第一、四十五歳と思えないほど、術後の食欲が旺盛だったから、体力の回復はめざましかった。十代や二十代と違って、梨山くらの年齢になると、手術の打撃のために、食欲ががっくりと落ちるのが普通なのだ。ぼくがある時用事で夕食時の食堂をのぞいてみると、彼は療養所から出る副食のほかに、自前で購入した豚肉を自分でつけ焼

きにして皿に山盛りになっていた。そのわきのプラスチックのボールにレタスをこれまた山盛りになっていた。それらは、術後の患者の優に三人分はたっぷりあった。彼は豚肉を頬張り、そしてレタスにさつと食塩をふって、それへ飯の塊りをいれて器用に指先でくるくるとまきこんで、口の中へおしこんだ。そうやって彼は如何にもしあわせそうに口を動かしては次々とそれらを平らげていた。そういう彼について、懸念がただ一つだけあった。それは血清肝炎だった。十人手術をすれば、その大量輸血にもなつて、必ずといってよいくらい、二人か三人にその症状が現れる。その現れ方も、手術後二週間とか、四週間とか、二カ月め、四カ月め、という風な現れ方をするのだった。七月中旬の退院ということになると、厳密にいつて満四カ月に幾分日数が足りない。それに、六カ月もたつてから症状が出る場合だつて珍しくはないのだった。そして梨山の一番新しい肝機能検査では、血清肝炎を示す指数は正常値の上限と通常認められている数値より遙かに低く、殆ど問題にもならないと思われたが、手術直後からの指数のグラフが次第に上向きの傾向をたどっていることが、ぼくの胸に小さな懸念としてひっかかっていたのだった。数値がいかに低からうと、グラフが上向き傾向だというのは、警戒を要することだった。

私が毎日どんな思いで、変つていきつつある私の家庭のことや私の妻のことを考えているか、先生にはおわかりですか、と梨山は殆ど抑揚のない低い声で喋っていた、私が日本人ではなくて、私の妻が日本人であるということがどんなことか、その妻が三年も私と離れていて、そして外へ出て働いているということがどんなことか、それがおわかりですかねえ。

そしてその時、殆ど冷笑ともいえるかすかな笑いの翳がうつすらと、薬でどす黒くなった彼の顔に浮んだのだ。

失礼だけれども、先生は私よりずっと若い、と梨山は言った、先生のように、恵まれた道を、何事もなく真直ぐに歩いて来られた人には、私たちのような夫婦が、どんなつらい関係におかれているか、想像も

つかないんでしょねえ、だから先生は人がこんなに苦しんでいるのに、そういう平気な顔をしておられるんですよ。

何と言うか、という鋭い叫びがその時ぼくの体をつらぬいたのだった、なんにもおれのことを知りやがらないくせに、貴様はいったい何をいうか。

最後の梨山のその言葉が、優柔不断なぼくの心を突き破ったのだった。彼のその言葉で、医師としてのぼくの義務感のようなものをぼくは捨てた。ぼくは、いまだかつて誰にも、ぼくの妻にさえも、開いてみせたことのないぼくの内側に存在する黒々とした力に突きとばされ、まったく突然に、実に簡単に、退院許可を梨山に与えたのだった、梨山の声よりもっと冷たい声で。

今朝、月に一度の定期診察日でもないのに、その梨山玉烈が診療室へ姿を現した時、ぼくは、彼の顔を見た途端に自分の顔色が変わるのを感じた。ぼくは思わず震えた。

ぼくの前にある梨山玉烈の顔。一度すっかり脱色して、それから内側から純粹の黄色一色で染めあげた透き通るような顔。二つの窪みの中に、赤黄色の膿がとろと溜って出来た小さな池の眼。みえない分銅をくりつけられて、ひきずるように動いてくる足。一步毎に短く浅くはき出される哀れな息。口にあてたハンカチを烈しく震わせる鋭い吐き気。ひたいにびっしり並んだ、透明な疣のような汗の粒。疑う余地はまったくなかった。急性の血清肝炎そのものだった。

梨山がのろのとぼくの前に腰をおろした時、ぼくはいきなり言った、梨山さん、たった今、再入院しなさい。ぼくはあまりに強い衝撃を受けたので、ただそれだけのことを言っただけで、小腸がうねりながらのたうつのを感じ、急激な腹痛に襲われた。両手を横腹にぼくはあてがって、うねる小腸の中心めがけて力いっぱい締めつけながら、体を少し折ってこらえた。

再入院ですか、と予期していたかのように、しかしまるきり力のない声でそっけなく梨山は言った、そ